

第3回

田原市・渥美町による新市のまちづくり講演会

日 時 平成16年10月26日(火)
会 場 田原文化会館文化ホール
講 師 愛知大学名誉教授 経営学博士
河 合 秀 敏 氏
主 催 田原市・渥美町合併協議会

渥美半島の人と自然 新しいまちづくりを目指して

【司会】 大変長らくお待たせをいたしました。ただいまから「第3回田原市・渥美町の合併による新市のまちづくり講演会」を開催いたします。

今日は、ご多忙の中、たくさんの皆様にご来場いただきまして、まことにありがとうございます。講演に先立ち、今日は、新市の将来を担う小学生の皆さんに「僕の夢・私の夢」という作文を発表していただきます。会場地の地元小学校、田原市立田原中部小学校6年生の皆さんにお願いをしました。書いてくれた全作品は、お手元に配布してあります。

それでは、6年生の皆さんを代表して、中神圭祐君、渡辺愛実さん、よろしく申し上げます。

【中神】 田原市立田原中部小学校 6年2組 中神圭祐です。

【渡辺】 田原市立田原中部小学校 6年1組 渡辺愛実です。

【中神】 僕は6年2組男子の「僕の夢」の一部を発表しますので、聞いてください。

【渡辺】 私は6年1組女子の「私の夢」の一部を発表しますので、聞いてください。

【中神】 まず、はじめに僕の夢です。6年1組 中神圭祐。

「食べ物の好ききらいは多いけど、料理をすることは好きなので、料理の達人になりたいです。」

【渡辺】 次は、私の夢です。6年2組 渡辺愛実。

「小さい子が大好きなので、幼稚園の先生になりたいです。みんなに好かれる先生になりたいです。」

【中神】 次からは、友達の「僕の夢」です。

6年2組 加藤雅人

「おもちゃ屋かブックオフのようなリサイクルショップの係長になりたい。」

【渡辺】 私も次からは、友達の「私の夢」です。

6年1組 水野春香

「私は、歌を歌うのが好きなので、ソプラノ歌手になって、みんなが感激してくれる歌を歌いたいです。」

【中神】 6年2組 中神康彰

「やりがいのある仕事をみつけていっしょうけんめいとりくみたい。」

【渡辺】 6年1組 渡辺いづみ

「私の夢は、まだ決まっていないけど、人の役に立って『ありがとう』と言われる仕事をやりたいです。」

【中神】 6年2組 福井通人

「車がとても好きなので、車のレーサーになって、大金持ちになりたい。」

【渡辺】 6年1組 松野有里

「私の夢は、ペットショップの人になることです。その理由は動物が大好きだからです。」

【中神】 6年2組 鈴木泰紀

「医者 of 眼科の先生に助けてもらったので、ぼくも医者 of 眼科の先生になりたい。」

【渡辺】 6年1組 高瀬すみれ

「私は、将来学校の先生になりたいです。先生になって、みんなが勉強を楽しめる授業をしたいです。」

【中神】 6年2組 三浦誠貴

「野球をやっているから、プロ野球選手になってホームランやヒットをたくさん打ちたい。」

【渡辺】 6年1組 金子典代

「私は、将来画家になりたいです。自分が描いていてよい気分になれるような絵を描きたいです。」

【中神】 これ以外にも、僕たちは(私たちは)、ひとり一人いろいろな夢を持っています。

【渡辺】 僕たちも(私たちも)一生懸命がんばりますから、どうか一人でも多くの夢をかなうことができるような立派なまちをつくってください。

【中神・渡辺】 お願いします。

【司会】 ありがとうございます。

続きまして、本日の主催者であります、田原市・渥美町合併協議会会長 白井孝市よりあいさつ申し上げます。

【田原市・渥美町合併協議会会長：白井孝市】 皆様、こんばんは。

ただいま紹介がありましたように、合併協議会の主催によります、まちづくり講演会を開催いたしましたところ、今日はあいにくのお天気になりましたが、渥美半島内の各地から、またご遠方から、本当に大勢の皆様方にご参集を賜りまして、まことにありがとうございます。

合併協議の方も、本日も第6回の合併協議会を進めてまいりまして、あと2～3回で合併協議もほぼめどがつくのではないかと考えておりますが、この合併協議が整いましたら、来月の中旬以降になると思いますが、それぞれまた別途、協議でまとまりました内容について、ご報告会をさせていただきたいと予定いたしております。そちらの方も、またよろしくお願ひしたいと思います。

さて、合併協議会では、少しでも皆様方に合併に関心を持っていただくということで、この講演会を開催いたしております。

本日は、第3回目になりましたが、ただいま子供さんたちが21世紀の渥美半島をよろしくお願ひいたしますと、我々大人にこう頼まれました。本当に子供さんの夢もかなえてまいりたいと思ひますし、この渥美半島のこれからにつきまして、本日は、皆様方ご存じの、田原市白谷出身の愛知大学名誉教授の河合秀敏先生に、「渥美半島の人と自然」と題してご講演をお願いすることにいたしております。

先生につきましては、いろいろなご紹介が書いてありますが、その中の資料の一つに、白い紙で「白谷（しろや）あれこれ」と書いた紙が入っていると思ひます。こうしてみますと、先生がいかにかこの地域に對します思い入れがあるかということが、これをお読みになると大変よくわかると思ひます。そうした意味で、これからの新しいまちづくりを目指して、「渥美半島の人と自然」のご講演を賜りたいと思ひます。ご期待を申し上げまして、ご清聴を賜りたいと思ひます。

それでは、よろしくお願ひをいたします。

【司会】 ありがとうございます。

それでは、講演会を始めたいと思ひます。

本日の講師は、現在、愛知大学名誉教授としてご活躍されております河合秀敏先生にお願ひしております。プロフィール等につきましては、お手元の資料にてご案内をさせていただいておりますので、ご覧ください。

それでは早速、河合先生に「渥美半島の人と自然 - 新しいまちづくりを目指して - 」と題しましてご講演をいただきます。

皆さん、拍手でお迎えください。

(拍手)

【愛知大学名誉教授・経営学博士：河合秀敏氏】 皆さん、こんばんは。

ご紹介いただきました河合秀敏です。今日、お話申し上げますのは、「渥美半島の人と自然」というテーマをつけてみたんですが、これは私がつけたわけです。さて、これは困ったことになったぞと思ひました。というのは、渥美半島という概念が、どこからどこまでを渥美半島というかということなんです。皆さんも渥美半島、渥美半島と呼んでいるが、どこからどこまでを渥美半島というのかと。これは定義が難

しいんです。それで、今日も市役所のしかるべき方に「ちょっと調べてくれんかね」と聞きましたら、半島振興法という法律があるんだそうです。半島を振興させる法律というのが昭和60年に出ておるんです。これによりますと、「三方を海に囲まれ、平地に恵まれず、水資源が乏しいなど国土資源の利用の面における制約から産業基盤、生活環境など、他の地域に比較して低位にある半島地域」と、こうなっているわけです。三方は海に囲まれておるから半島だと、こういうことになるわけです。

それで、もう少し何とかならないかということで調べてもらいましたら、「自然地名集」というものがございまして、渥美半島の定義というのがありまして、「田原市、渥美町、豊橋市」としてあるんです。コメントがついておりまして、これは国土地理院の中部地方測量部測量課の方が、「豊橋市すべてが半島とは言えないが、市町村単位の定めざるを得ないために、このような記述になったのではないかと、こう言っておられまして、渥美半島というと、豊橋から田原を含めて渥美半島というのかなということになります。何だか気に入らない定義なものですから、今度は広辞苑を引いてみましたら、「陸地が海に長く突き出したところ」としてあるんです。これはなかなかいいかなと。「陸地が海に突き出したところで、小さなものを岬という」としてあるんです。そうすると、渥美半島の先端は伊良湖岬と言いますから、あれも岬なんですね。それから、「鼻」という言葉もあるんです。例えば、浦の先端のところに竜江ノ鼻というのがありました。今はトヨタ自動車の埋立てになっていて、私たちはあそこでキスを釣るときのアサリを取りに行っていたんです。だから、「鼻に行く、鼻に行く」という言葉を使っていました。そんなことで、英語ではペニンシュラというので、アツミペニンシュラと言いますが、半島というのは、おおよそ突き出したところと考えられます。

しかし、気に入らないのは、ほかの地域と比べて低位だということなんです。産業にもおくれて、生活水準もおくれてと、これを半島と定義しているんです。能登半島だとか紀伊半島だとか伊豆半島というのは、ちょっと渥美半島よりは大きいけれど、この辺でいうと知多半島と渥美半島。これがどうも半島だということだと思っんです。

そんなことで、一遍考えますと、渥美半島というのは、豊橋のどこから先を言うんだと、こういうことだと思っんです。それで、この渥美というのは三河地方なんです。三河山間部からずっと渥美の先端までを三河と呼んでおりますが、三河というのは大体愛知県の中の10分の1の経済の力しかないんです。10%です。そうしますと、県サイドから見ますと、東三河というのは、どうも10%ぐらいの、1割ぐらいの力しかないように見ているわけなんです。それで、これが政治的には西高東低と言われておるわけです。西に高く東に低いと。桑原知事が立候補したころは、西高東低を何とかしてくれということが一つの選挙のうたい文句になっておったように思っんですけれども、今はどうかというと、非常に恵まれた状況になっておりまして、その恵まれた状況のポイントは何かというと、これは豊川用水でございまして、もう一つは臨海部の、いわゆる産業立地化というこの二つのメリットが非常に大きく生きてきているわけです。

この豊川用水というのは、人間が生活するのにまず水が必要なんです、生活用水が不足しているので渥美半島に水を引っ張ったというより、むしろ、農業用水として引っ張ったんです。渥美半島の先端までいってあります。それから、蒲郡の先端までいってあります。そうして、この二分水嶺は、農地に対する、また生活の水に対する、また工業製品をつくる立地企業に対する三つの大きなメリットを上げておるわけです。源流は豊川の上流になるわけです。宇連ダム、その他でございまして。皆さんはこれを日々、頭から

切り離すわけにはいかないというのが、ここで生活している人たちの考え方だと思うんです。

私も白谷で育ちまして、子供のころ雨水で生活をしていました。それと、山の清水でも生活をしておりました。大体、下が石灰石で掘るわけにはいきませんし、そして、白谷の村というのは、特に私の家は、ちょっと高いところをございまして、渥美半島に1カ所だけです。熱海があると私は思っているんです。階段式の家ができておりまして、温泉が出ないだけでございます。それで、水はどうしておったかということ、天からの貰い水を、ため池があってそこに入れたり、それから、後ほど海岸べたのところは繭の出荷場がありまして、その下に井戸を一本掘ったんです。これがときどき塩水が混ざりまして、その塩水が混ざるせいか、お茶をいただいても、お茶の味がよくわからないんです。塩水を飲んでいると多分舌の感覚が狂ってくると思うんです。だから、おいしいお茶なのか、まずいお茶なのか、コーヒーがうまいのか、まずいのか区別がいまだにつかないのは私だけはどうもないようなんです。白谷の住人はみんなそんな環境で育っているわけで、お酒を飲むと敏感になって、お酒のおいしいまずいはよくわかるけれど、お茶はちょっと区別がつかない。何をいただいてもおいしい、おいしいと飲んでいました。そんなことで、水の問題をまず頭に入れておく必要があるんです。

それから、もう一つは、やっぱり臨海部の産業でございます。これがおこってきたのは30年代の後半から40年代にかけまして、20年ぐらいの間に三河湾が工業化されたわけです。これは国土計画、もしくは地方計画で三河湾の埋め立てをして、工業立地をやろうという計画が具体化していったわけでございます。だから、今、田原はご案内のとおり、大きな埋立ての中にトヨタ自動車というメインが入っております。田原工場はトヨタ自動車の中でも誇れる工場なんですね。すばらしい力を持っております。トヨタを初めとして、いろいろな会社が出ておりますが、まだ空いたところもいっぱいあります。この二つのバランスがうまく、今、動いておるわけです。これは、豊川用水も、それから臨海部の企業もよそ者でございます。私は異民族と言っているんです。失礼な言葉ですけど、進駐軍でございます。昔からいたのは、やっぱり農業とか漁業で、半農半漁で生きてきたわけです。渥美半島はやっぱり海に囲まれているわけだから、海を殺してしまいますと生きられないんです。昔から、内海である私のうち、それから、外海の渥美のところ、これは海といっても全く性格が違っておりますけれども、これで人間はうまく生きてきておったわけです。

それで、私は白谷で生まれましたけれども、渥美町とのハーフでございます。母親が渥美町の土田からお嫁入りしてきたわけですから。そして、私は鳳来町からお嫁さんをもらいましたので、また子供たちは鳳来町とのハーフでございます。山ですね。そういう関係になっておりますものですから、山の人たちはうまく生活できているのかなと、あらゆるところに私は関心を持つわけです。

結婚したころは、山の人には非常に幸せで、私が嫁さんのお在所に行きますと、「お10時です」と言うんです。何がお10時かなと思うとお茶が出るんです。お茶の時間なんです。3時になると「お3時です」と言うんです。何かかなと思ったらまたお茶が出て、お菓子が出るんです。のんびりした生活をなさっておるころだなと思いました。

ところが、白谷はどうでしょうか。大体、お10時です、お3時ですなんて言葉がないんです。魚が来たと言ったら24時間働いていますから、もうイワシが来たなんて言うと、10時も3時もないんです。この秋口になると、大海へ出て行くイワシが群がって入ってくるんです。それで、さす目という網を入れますと、

どーんと浮きが沈んでしまうんです。私たちは小さかったから、船のともというところに入れられて、「おまえはそこへ入っとれ」と、首だけこう出して見ている。そうすると、おじいさんたちが網をやって、「おい、これはあかんぞ」と言って、網を切るわけです。切って、船へ上げまして、あとをおいておいて、陸へ持ってくるんです。そうすると、みんながさす目で首を突っ込んだイワシの首を抜くんです。そうして「好きなだけ持ってってくれ」と言われても、なおかつ余ってしまって、大きなお湯の中にどーんと入れて、それを日乾しにして鳥の餌にしたり、肥料にしたりしておったわけです。そんな状態で、山と海とは全く生活の体制が違うんです。

海は、ご承知のとおり潮時というのを考えないと生きていけないんです。それで、私は土田が在所なものですから、行くと、そこに海を眺める場所があるんです。浜の高いところですね。そこで日和を見たり、それから、魚が来たから地引き網をやるとか、そういうことをやっていたんだらうと思いますけれど、これまた、生き生きのカキが取れまして、このカキが何とも、夏ガキでございますから、1個食べると卵の三つ分ぐらいあるのをいただいたりして大きくなったわけでございます。

そんなことを考えますと、渥美半島の農業というのは、海をギブアップした皆さんが農業に転換したというのが、今の渥美の特徴ではないかと、こんなふうに思うんです。まだ漁業をやっている方は二百数十名あるようでございますが、漁業関係の総会の決議録や農業関係の決議録、それからまた、商店街の決議録をどんな状況かなと一通り見せてもらいました。みな健全でございますね。全く心配ございません。だから、もう安心して自分たちが生きていく道を模索しているのがわかります。

特に、農業なんていうのは、愛知みなみでしょう。二つが合併いたしました。そして、すばらしい内容を持って、高額所得を上げておられるんです。だから、そういう点で見ると、伝統的な農業と漁業、漁業は細々になっておりますが、田原の場合には50名ぐらいしか正式な漁業組合員はいないというようなかたちになって、減ってはおりますけれども、まだ信念を持ってやってくださっている方がかなりいるわけでございます。だから、そういうことをいろいろ考えますと、やっぱり地元の人たちが、海を捨てて上がってしまうということに、私は非常な抵抗を感じているわけでございます。

子供のころ磯があって、今は立派な白谷の臨海部の公園になってしまっておりまして、今日もそこを通過して、田舎のうちへ行って、2時間ほど畳の上でひっくり返ってテレビを見ていたんですが、地震があって気の毒だなと思って見ておりましたけれども、そのときにふっと感じたのは、私のうちは戸を外しますと、四間大きくなるんです。8畳、10畳かな、そういう仕組みになっていて、そこが全部お蚕を飼う部屋になっていたんです。そして下に、冬の間、炭が焚けるようになっておりまして、そんな構造になっていて、子供のころ、よく天井を拭かされて、この天井を拭くのに一苦労したなと思いながら見ていたわけですが、そんなことでこの50年間、もしくは60年間を振り返ってみますと、まず、地元の人たちが永住して食べていくものの質がどんどん変わってきております。それから、よそから来た人たちの力がこれに加わっているわけです。その二つのパワーがうまくバランスしているのがこの地方ではないかなと思うわけです。

無意識に生きていると、あまりそういうことは感じないかもしれませんが、私は小さいときから、教育を受けた根底のところは何があったかということ、教育をつけると長男はうちを出してしまうから教育してはいけないというのがおじい様の思想であったんです。うちのおじい様は九州帰りの船を経営していた

人で、九州のこともわかり、それから、造ったうちの中の梁や何かは米松が使ってあるということで、私は米松だか本当かよくわかりませんが、ちょっと変わったものが使っています。そういう方が長男は教育をつけたらだめだということで、勉強に反対するわけです。教育して何になるんだと、役に立つことはないというような言い方をして、教育させないことがおじい様の考え方だったのです。これはどういうことかという、結局、儒教の影響で家や先祖というものを大事にしていくということなんです。長男を教育しますと必ず出て行ってしまふんです。帰って来てくれるといいけれど、なかなかそれが帰らない。死んだらどうなるか。魂だけ帰るんです。

私は、先週10日余りエジプトへ行っておりました。そのエジプトではナイル川の水を飲んで育った者は、世界のどこへ行っても魂はナイルへ帰るとい言葉があるそうです。なかなか良い言葉だなと思って、渥美半島の水を飲んで育った者は、いずれまた渥美半島に帰るといことです。定年になってお帰りになるのは立派だし、それから、死んで魂が帰ってくると、そう信じてもいいのではないかなと思っているんです。ここにいる人は、そんな幸せなことはいけれど。

そういうことで、一つ例を出しますと、すばらしい話がございます。山田春さんという方が田原から出ました。この方は東大を出て、三菱銀行へ勤めました。そして、三菱銀行の頭取をいたしました。そして、銀行協会の会長をやりまして、勲一等をもらった方でございます。長男だけでも出てしまつて、兄弟が4人くらいおみえになったのではないのでしょうか。みんな先に亡くなって、今年の8月16日に山田さんもお亡くなりになりました。89歳。現役の東京三菱の顧問でございます。毎日出勤していたんです。すごい方です。

私は、成章高校の同窓会の世話人をさせてもらっておりまして、この東京の責任者を山田さんがずっとやってくださっております。お亡くなりになりましたので新聞に出ましたので、ちょっとお伺いしたいと思つたら、田原市役所の方には訃報は入つたけれど、一切、弔電も何も打ってくれるなど、新聞には住所は不詳の形で扱っておるわけです。私はしょうがないから速達を出しました。右代わりましてごあいさつをしたいと言いましたら、息子さんが野口英世の英世という名前なんですが、その英世さんが、「全員を断っているわけがございませんので、お越してください」といので、行って、1時間ほどお話をしてみましたが、すごい方でございます。

こういう方は地元あまりみえないんだけど、すごく影響力を持って人生を送っている方ですね。私は、三菱銀行の本店などへ行ってお目にかかっていました。「おい、河合君。成章高校を成章館高校に変えるよ」と、こういうことを言うので、そんなことができるはずがないなと思ひながら、御大の言うことでございますから「はい、心がけましょう」と。県の教育委員会へ行くところから「今どき何を言つとるんだ」と言われるけれども、これは、成章が田原にあつて、昔の藩校の成章館が成章高校になったからといことで、関心を強くお持ちになっているんです。

それで、私はふつと思つたことは、山田さんのご提案は非常にすばらしいけれども、遠くへ出たら、僕は地元の人たちの意向を尊重してあげたらいいなといことをふつと感じたんです。遠くの人やいない人が、ああだこうだといのはいいけれども、それを聞かないからといつて、腹を立てたり、何だりするといのは具合の悪いことだと私は思っております。といのは、地元の人たちが知恵を使ひまして、おれたちは生きていくためにこれをやらないといけないなと思つたことはやっているはずでございます。

例えば、合併もそうです。渥美町が投票してみたら85%が田原市と一緒にさせてもらえないかという提案をしたわけです。田原もびっくり仰天で、それでは何とか考えようかといって、事が進んでいるのが今、渥美町と田原市の合併でございます。その前の赤羽根町もそうございました。赤羽根町が立候補してきて一緒になって、またすぐ渥美町と、こういう形でございますので、こういうことがすっすと決まっていって、しかも、赤羽根町と田原町が合併して田原市になったというのは、愛知県で一号なんです。政府も困ったのでひとつ、今の総務省ですが、「合併やってくれ」と一生懸命で言っているんだけど、地元の意向を尊重しておりますから、なかなか強制力がないです。地元の人が賛成だったらやってほしいと。やったらこんなあめをつけてあげましょうと、いろいろなあめがついているんです。甘いものがついております。それも3月までにやらないとだめですよという期限付きになっているんですが、どこでもそう簡単に動きません。

ところが、ここではすっすと動くのは何でだろうかと考えるわけです。私は潮時だと思んです。これは、時の流れを見る目が非常に強い、魚の来る時期を見て、追っかけるのが強いというようなものが、潜在的にDNAとして入っているのが渥美半島だなと考えるんですが、いかがですか、皆さん。DNAがそういう時を読む力、時の利を得るといふことに強いのではないかなと思っております。そのかわり、朝令暮改で、朝決めたことを昼にひっくり返すということがあるということで、大騒ぎをしますけれど、まさに合併はしないということで解散したかと思ったら、また急に始まったりするでしょう。何だ、おっちょこちょいがとこう思うけれど、これは潮時を見ているわけです。

吉良上野介のいた一色に行って、あちらこちらのお寺をのぞいてごらん下さい。名言があります。それは「人を切る刀はあるが、時の流れを切る刀はない」としてあるんです。時の流れというのは、なかなか読み切れないんです。それで、先を見る人と、いや、現状でいいんだという人とあって、例えば、合併でも総論賛成、各論反対というのはいっぱいいるんです。そんなことをしてもらっては困るとか、合併はいいけれども、ここだけは何とかしてくれという意見が強くなるのが合併でございますけれども、大所高所、渥美半島でございますから、これは一つというのがいいのではないかと、私は日ごろ思っております。だから、健全な選択だと、こんなことを言うとまた言い過ぎかなとは思いましたけれど、まさにそうだと思います。

ここは、30年代初めに合併をしているんです。そのときも大分ごたごたはしましたけれども、その後、合併してメリットが出ております。それで、私は小さな村で育っているからよくわかるんですが、白谷という村はご案内のとおり山の向こう側だったんです。田原に出てくるのには峠を越して、乳母車に乗せてもらって、お彼岸のときにお寺さんまで来るんです。私は、城宝寺でございますから、うどん屋さんでうどんをよばれたり、餅をよばれたりして、世の中にはうまいものがあるんだなと思って帰るというような生活だったわけです。

その中で小学校があるわけですが、これが3学級しかないわけです。1・2年が一緒、3・4年が一緒、それから、5・6年が一緒。それで、5年と6年がどういうことかけんかをやったのか覚えがないが、けんかをしまして、一日いなかったことがあるんです。それで、帰って来たら先生が怒るかと思ったら、怒らないんです。「おまえたちどこへ行っておったんだ」なんて。それで終わったりして、何か変なかたちで育っているんです。

ところが、私が小学校2年のときだったと思うんですけど、中部の小学校へお習字に行ったんです。習字の大会だとかといって、おまえ行ってこいというので、記憶がはっきりしておりませんが、多分先生に連れられて行くと、建物が鉄筋なんです。そうしたら、足ががくがくになりまして、書けなかった記憶があるんです。わっ、すごいところの学校の子たちと、ここで一緒に書くのかと思ひまして、小さな学校で育ちますと肝っ玉が小さいんです。自分の生活環境の中で考えますから、小心になるというのは当たり前のことなんです。それで、視野を広くしろといったって無理なんです。そういう体質が身についてしまうんです。高等学校でもそんな小さなスケールだし、大学でもそんなスケール。それで、だんだんと動いているうちに、「ああ、人間というのはあんまり差はないんだな」ということを感じる時期があるんです。例えば、銀行なんかへ行くと鉄筋ですよ。すごい人間がいるのかなと、先入観で見てもだめになってしまうんです。人間というのは大差ないんです。ちょっと脱いで、裸になってみればみんな一緒なんです。でも今度は、外国の人たちにコンプレックスを持つんです。

私は、フランス石油という東京証券場に上場するようなお仕事を若いときにしました。そのときもフランス人やアメリカ人やいろいろな方にお目にかかって、事を進めなければならぬんですが、私はプロフェッサーでございますからアドバイザー・サービスというもので、直接自分が手を取るわけではございません。

例えば、フランスに行きましても、「プロフェッサー、どこへ行きたい」と言うから、「僕はフランス銀行の地下へ行きたい」と言ったんです。これは、ジャン・ギャバンだったか、何だったか映画で見たら、あそこで靴の音だけが、カタカタ、カタカタいいまして、すごく印象に残っているんです。「ぜひ、ひとつそこへ入れてほしい」と言ったら、これは大蔵省の仕事ですから、高官として行けるわけです。そうしたら連れて行ってくださいました。案内する人と私の2人だけで、靴の音だけがするすごい石の中なので、でかい金庫がありまして、「わっ、これがフランス銀行か」と思いました。

このフランス石油というのはメジャーでして、今もめている中近東に180ぐらい子会社を持っているんです。そして、石油を掘っていたんですけど、僕が感心したのは、植民地政策をとっているんだけど、何十年かしたらこの石油の油田をあなたたちに戻してあげると、販売権だけをうちが持つという契約をしているんです。日本はそういう契約を恐らくしないです。おれたちのもので、おれたちが末代使わなければならないというような発想で、植民地政策を、恐らく日本はしたのではないかと思います。これが第二次世界大戦を生み出すような要因になったのかもしれないという気はいたします。

そんな話をしているとちょっと長くなりますが、そういう気の小さいことは、今は情報化社会だから、恐らくテレビを見たり、いろいろして若い人たちにはそういうコンプレックスはないと思いますけれども、そのコンプレックスがあるときは、逆にまわして、何か自分の目的を定めて、力いっぱいやったらすごい力になると思います。

これは私の体験でございます。長男がうちを出てしまっているということに対する負担がものすごくあるんです。豊橋に住んでいても、これは仕事の面でやむを得ないから豊橋にいて、東京や大阪へ行けばいくらでも私が若いころは職場があったわけですけど、よう動かず、豊橋にいて、一代、愛大でお世話になりました。だから、いつもイソギンチャク教授と言っているんです。イソギンチャクというのは、ご承知のとおり、磯の間でぴかぴかと非常にきれいな色を出して、魚が来るとキュッと捕まえるわけです。

自分は動かないで、小魚を捕まえるわけなんです。

そういう一代を費やして、この3月に定年になりまして、何か非常に拘束力が取れまして、白井市長さんに「ちょっと田原へ来て手伝わんか」と言われて、とってもうれしいんです。これは、何か自分が出稼ぎをしております、出稼ぎという言葉はあまりよくないかもしれませんが、例えば、遠洋航路をしてきて、やっと港へ戻ってきたと、こんな感じで今いるわけでございます。半年過ぎましたけれども、なかなか忙しくて動き回っておりますけれども、やっぱり渥美半島で育つということは、山間で育つと同じような心理状況を持っています。私は教育者でございますので、山間から来たという子とかに特に関心を持ちます。そうしますと、やっぱり非常に小心なんです。よくできるんだけど小心なんです。それで、そういうものをとる訓練してあげなければいけないので、ときどき訓練をします。そうすると、だんだんと取れていくような感じがします。それから、ここで育つと言葉がしゃべれないんです。

それは、皆さんが方言が出るといっていますが、田原でしゃべれば恐らく方言が何だかわからないから、私が正常な言葉でしゃべっているように聞き取れると思います。でも東京、大阪へ行きますと講演しますと、特に、公認会計士の皆さんとか、大会社の監査役という役割がある方たちにスピーチをすると、パーティーのときに来まして、「先生、三河でしょう」と言ってくるんですよ。「どうしてわかるのかね」と言ったら、「今日の話聞いていて、これは間違いなく三河だと。僕も三河です」と、言ってくるのがいくらでもいるので、「ああ、あなたもこんなところへ出稼ぎに来ているのか」と言うわけです。そんなかたちで、人間の職業選択というものは、地元にいる方ではちょっとわからないんです。

それで、私はわずかな人生で、まだ先輩もたくさんおりますけれども、70歳を過ぎておりますから、皆さんからすると比較的先輩の部類だと思います。年を取ったのがいい加減なことを言っているなと思うかもしれませんが、人間の人生を考えますと、秋に紅葉した落ち葉がちゃんと川に落ちます。そうすると、その川で岩に挟まって、もう動かない落ち葉や、それから、濁流にのまれてしまって川底へ沈んだり、それから、ふわふわ、ふわふわ浮いていって、大海へ出て行く落ち葉や、そして魚に食われるかどうか知りませんが、いろいろあるんです。人生というのは、どうもこんな感じかなという気がこの頃するんです。落ち葉が落ちていって、それがどういうふう流れていくかというようなかたちに考えられてしょうがない。これは、ほとんど90%ぐらい運命なんです。自分が選択して、長男だからうちにいるというのは一番立派なことだと私は思うんですが、今後もそれでいいかということ、これはなかなか問題があります。

なぜ問題があるかということ、これは合併もそうですけれども、社会の仕組みが全く変わってまいりました。例えば、自然を相手にして食べていく職業は一次産業でございます。それから、知恵を使って物づくりをするというのが二次産業でございます。それから、それを販売したりしてというのが三次産業です。公務員も三次産業ということ。こういう人たちがだんだん一次産業から二次産業へ労働をシフトしていくということを考えなければいけないんです。

そうすると、21世紀というのは、知的な社会になるんです。一番重要なものは何かといったら知なんです。知的な社会になるということはどういうことかということ、人間がそのままではどうしても生きていけないという時代なんです。例えば、農業をやっている、知的水準の高い、しかも集約的で、工業化された農業というようなものを思考していかなければいけない。ITができ上がってきたり、科学的なDNAの新製品が出てきたり、バイオの技術が生きてきたり、どんどん進化していきますから、そういうものを

身につけていく近代農業のあり方というのは、これはまさに一次産業ではなくて、二次、三次産業になっていくわけです。ここを農業の人たちは先行していかなければいけないと思います。

それから、漁業などは、これは渥美湾の問題もあって、栽培漁業みたいなものにエネルギーをすごく費やしていくとか、苦潮などがあってちょっと困る問題はありますけれども、その知能指数の高い領域に後輩が喜んで就職してくるような社会づくりというのをやっていかなければならない。自然の恵みだけを追いかけていては、自然のものは取り尽くしてしまいます。

戦後を見ても、私たちが小学校6年のころに終戦でございました。それで、食べるものがない。ところが、魚はものすごく取れたんです。海にスザメなんていうのがいまして、これは外へ出ないと息ができないサメなんです。これがぼこぼこ背中を出して、群をなして泳いでいる。また、軍艦が入ってきておりましたから、それにフカがついてきました。命が危ないから泳ぐなといわれて泳がなかったのですが、現に白谷の、今、埋立てたところに沖の磯というのがありまして、そこで島の人がフカに食われたんです。パクッとやられてしまった。うちが焼けたときに取り崩すトビというのがあります。あれでさばいているうちに引っかかって上がったという話は聞きましたが、子供ですから真実のほどはわかりません。そうして上がったのを、私たちは見に行ったわけです。見たいけれども、高くてみえないから、かろうじて、こうやって首を出して見たら、この腹のところがない。人の腹の中を見たのは初めてでございます。そうしましたら、1週間ぐらい寝られなかったですね。ショックが大きくて。ちょうど、小川さんという院長さんがいて、それが検死に来ておまして、そういうこともあったりしたわけです。だから、自然とともに生きるという生き方を少し変えていかなければいけないというのが21世紀だと思うんです。渥美半島も積極的に変えていかなければならないと思います。

それで、こんないい場所で農業だけで生きていたのでは、どうしても具合が悪いなと私は思ったりするんです。この地方の農業は、日本で指折りの場所になっていて、出荷額なんかはトップで、すばらしい農業でございます。だけど、後継者はどうかというと、後継者にまだ恵まれなところがあるとか、後継者にお嫁さんがうまくつかないとか、いろいろな問題を抱えているわけです。だから、非常に近代化して、サラリーマンと同じような労働でもって農業ができるようなものを模索していくといいのではないかと思います。家畜を飼っている人たちもそうです。畜産ももっと近代化して行って、渥美湾に浮遊物が出ないようなかたちの管理をみんなやって、そこに金を投じていくことを、行政指導を受けてでもやって行って、効率を上げていかなければいけない時代に来たのかなと、こんなふうにいるんです。

これは当てずっぽうで、私の感でございまして、間違っていたら、皆さんも、「いや、先生、それはそうじゃないよ」ということで結構でございます。だから、一次産業も二次産業も、もう少し半島として、振興法をもっと使って振興してもらおうようなかたちをとりたいと思いますが、困ったことに国に金がないんです。日本全体には金が有り余るほどあるんです。外貨は、日本はすごくたくさんもっていて、外国為替の価値を見ても、今は106円になったでしょう。私がアメリカに留学したころは1ドル買うのに360円でございました。

先日、エジプトへ行きましたら、「ワンダラー、ワンダラー」と言ってお土産を売っているわけです。買え、買えと言うんです。106円ぐらいのものがお土産になるかと思えますけれど、ラクダに乗せてもらうとワンダラーだとか、そんなかたちでエジプトでは生活しておりますが、あそこには3,500年とか、

4,000年昔のピラミッドがあるわけです。あれはどうしてつくったのかいまだにわからないし、どういう目的でつくったのかもいまだに解明されていないです。墓場ではないかという説もあるし、いや、墓場ではなくて神様に一番近いところまで王様を上げるための場所ではなかったのかとか、いろいろな説が二つも三つもございます、定説がないと言われております。

ところが、そのピラミッドをつくったことによって、子孫の皆様が今食べているんです。すごく大勢の方が食べておられます。観光資源としてはすごいことでございます。私は、たまたま定年になりまして、私事が今日は多いですが、皆さんに情報として流すんですが、イギリスのロンドンにシティクラブというプライベートなクラブがあります。クラブというのは、メンバーシップでメンバーしか入れられない。これがカナダ大使館の地下にありまして、昨年の12月ごろでしたけれど、ダイレクトメールで、「河合プロフェッサー、入らないか」と言ってきたものですから、さてはおれおれ詐欺だと思ひまして、まず疑ったわけです。私が定年になるというので退職金が入る。そうすると、これを何とか召し上げようとするのかと思ひました。ところが、調べれば調べるほど立派なところなんです。初めは、カナダ大使館の地下にそんなクラブが入るはずがないからと思ひて、まず、NTTへ電話しまして、住所を言うところはどうかと聞いたら間違いないので、いやいや、これはすごいところだぞと思ひまして、それで会長はだれかなと思ひて調べたら、国連の事務次長をやった明石さんなんです。東京都の知事に立候補した明石さんです。3日ほど前にもご一緒していたんですけれど、その方が責任者で、運用をされているイギリスのクラブの出先でございます。これが世界に200カ所ぐらいあるんです。その日本版なんです。

私が、なぜそんなところに心が動いたかということ、私は、若いころから大体アメリカとフランスの両方を集中して勉強していたんです。今日は藤城幸一君もおられるようで、僕が白谷でフランスの文献など読んでいると、幸一君が来て、まさか白谷でフランスの文献なんかを読んでいるなんて思いませんから、「おまえ何を読んどるだ？」なんて聞くんです。そんなことをやっているうちにおもしろくなってきて、だんだんとのめり込んでいってしまうんです。抜けられなくなるんです。それで、全く白谷と関係のない外国の文献ばかり読んでいて、そして、向こうの専門誌を読むと、プロフェッサーマウツというのが非常に納得のいく論文を書かれていて、ここのところへ何としても留学してみたいと思ひて決意をしたころ、大病してダウンしてしまっただけで、腹が痛くてしょうがないので、そうしたら、内科の某先生が、「あなたは神経だ」と言ったんです。大変失礼な言い方で、私、若かったけれど気に入らなかった。階段を上がり降りしていても右腹が痛むんです。

そうしたら、藤城佐一という私のおばあちゃんの弟ですが、田原の町長をやった方です。合併のときの町長です。この方が本を持ってきまして、桑原知事の『無胆の人』という本を持ってきたんです。「おまえ、この病気じゃなかったかな」というので、どうもそうらしいということで、桑原知事の添書というのをもらって、添書というのは一筆書いてもらったわけです。どうも同病らしいのでみてやってくれと、それで、名古屋の日赤でお世話になって、もう、外国に行くことはだめで、生きるか死ぬかになったわけです。あのころ腹を切るなんていうのは大変なことございました。アメリカへ行ってみんな胆のうの手術をしていたんです。今は盲腸ぐらいになったけれど、あのころはすごかったんです。肝臓の裏にくっついて。そうしたら、その院長が誤診だったというんです。腹を切られて誤診ではかなわんと思ひて、「痛

いか」というので、「予想した以上に痛い」と言ったら、「申しわけないけど、胆石だと思って切ったら、胆のうが癒着していたので、20日も入院しておれば治る」と言ってくれました。

治ったものですから、急にまたアメリカに行きたくなりまして、そのマウツのところへ行ったわけです。これがイリノイ大学。イリノイ大学なんて、皆さん、あんまり聞いたことがないので、農業大学ではないかと思うと思いますが、当時はアメリカでナンバーワンの会計学、監査の大学だったんです。博士号がアメリカで一番多く出ている、リトルトンというプロフェッサーがいて、その弟子がすばらしい業績を上げている人たちが大勢いたんです。そこへ入ったわけです。死にそこなったから、自分が興味を持ったことに必死になって2番目の命を何とか学問に費やすかということで、東京や大阪の連中に負けないうための勉強の仕方というのはどうだろうかというようなことを考えたわけです。田舎にいるからそういう発想はいいです。そうすると、歴史をやると確実に勝てると思って、まず、歴史からやるかということで、古いところからどんどん調べていったんです。

そうしたら、今度、エジプトへ行きましたらパピルスというのが出てきたんです。パピルスというのは紙の原点なんです。多分ギリシャ語だと思いますが、ナイル川の下流で葦が生えるんです。それを縦に割りまして、重しを置いておくと紙になるんです。これがパピルスです。それ以前のは大体羊皮紙といっていて、羊の皮へものを書いていたんです。羊の皮が紙の変わりだったんです。そんなことをずっと読んでいるうちに、だんだんとわかってくるんです。これはなかなかの知恵だなと思っているうちに、年を取ってしまったんです。

そんなことで、学問の話をしているとちょっとおかしくなりますが、大学の教授というのは、研究業績をどれだけ持っているかが戦う武器なんです。日本の大学の教授というのはそういう評価をしてくれないんです。大学で評価しているんです。どこどこ大学の教授だと。そうするとこのぐらいかということで、進学の難しさで教授を評価しているんです。これは間違った評価なんです。これから皆さんが、孫や子供が学校に行くときには、そこにどういう教授がいるのか、どういう専攻をしているのか、それでおまへは何がやりたいんだと、これを問わなければいけないです。その教授だったら、ぜひそこに入れというように、これがアメリカのスタイルなんです。今、大学はそうなってきました。自己評価、他人評価というかたちで大学が評価されるので、国立大学は全部独立法人になって、私学と同じかたちになってきました。予算は国がくれるけれども、いずれ自分で自助努力せよというんです。

こんなことが4月から始まったものですから、私が技術科学大学の監事なんていう役割をいただけることになったんです。通常だったらそんなのはあり得ないことです。大学法人豊橋技術科学大学、それに理事と監事があって、私が監事にご指名いただいているわけです。今から独立して、何とか競争させようということです。今までの大学教授というのは、教壇に立って、今日の授業は終わりという、大拍手が出るんです。そうすると、学生は偉大なる感銘を得たなんて言って、帰るんです。休講になった、休講になったと。そんな大学の仕組みが変わってきて、この教授はどのような業績を持って研究の成果を上げているのか、それから、自分はどのような勉強をしたいかというようなことをオリエンテーションしてあげるようなかたちにならないといけないと思います。

渥美半島で私が思うのは、割合少ないのがお医者さんです。地元で昔からお医者さんだった人が息子を医者にするというのはある。歯医者だった人を歯医者にする。ところが、医学に進む一般の人というのは

ほとんどないんです。それで、私のころを考えると、教育大へ行くと授業料が安いとか、教員の道が開けるといので、これが一番お金がなくても頑張れる仕組みであったように思います。もっと以前はただだったとか言われますけれども、職業の先の見えた進路というのは案外ないんです。

それで、公務員になるといったら、公務員は非常に賃金も安いし、白井市長さんにいつもお話を伺うと、私たちの入ったころはひどかったですよとおっしゃっているけれど、この白井市長もいくなればイソギンチャク市長でございます。もう就職してからずっと同じ場所にくっついておりまして、離れないのです。マグロ市長みたいになって、悠々と遊泳してきて、田原に落ちついたというのではないんですが、大変失礼な言い方でございます。自分たちの城を守るということでは一番具合がいいと思います。

だから、私は長男ではあるが、どうも、そんなふうに考えていくと、田原の今後の合併は、事をお進めになった方がよかろうと私は思うんです。押しつけはいたしません。これは皆さんの判断でございますから、よそ者が何を言うかと言われればそれで終わりでございます。だけど、私は現住所はあちこち動いておりますけれど、本籍は移動させておりませんから田原にあります。そんなふうに先発を切っていくのは、これは潮時に敏感な住民の住んだ地域だから、やって当然の話だなと思います。

それでは、合併はどんな問題を抱えているのかということをちょっとお話し上げます。

もともとの起こりは、地方自治という考え方を強化していこうという考え方です。例えば、田原市というのであれば、おまえたち自分たちで考えて、自分たちでやれという、哲学的には自治の確立でございます。まちづくりでございますが、その裏には国に金がなくなったと、こういうお話なんです。「おふくろ、金くれ」、「金はないよ。おまえ、自分で何とか自活してくれないか」という現象が、今の国の現象でございます。国は、地方自治体からおねだりされたら、地元が選挙区で選挙に落ちるから「ノー」と言えない。何としてももらってこないとうまくいかないということがあられるわけです。以前よりも陳情政治は緩みましたが、日本は典型的な陳情政治でございます。陳情というのはお願いに上がってお金をもらうというものです。予算をつけてもらうということです。国が半分つけてくれれば、県がまたつけてくれる。それで、自分たちの金も比較的少なくて済むので、インフラの部分を、まちづくりの基本をやらせてもらうという、おんぶに抱っここの仕組みなんです。3割自治という悪い言葉がありました。自分の金は3割、7割は国だと。困り果てた国は、どうしたかという、三位一体という考え方を出してきました。税源のものを少しあなたたちにあげるから、自分たちの収入でやらせてもらって、交付税も補助金も減らさしてくれないかということです。また義務教育を地元でやってくれないかとか、何だかみんな、権限を委譲するというよさそうな言葉ですが、本当は国に金がなくなって、借金でどろどろでございますから、何とかならないかなという考えでございます。

昔は、こういうのは簡単にうまく操作できたんです。どうやって操作するかというと、国債をたくさん抱えて困ったといえば、インフレにすればいいんです。日銀がどんどん金を発行しますと、インフレになります。そうすると、借金はただみたいになります。紙切れになります。戦後、皆さんが生命保険と国債を持っていたらみなただになったんです。あれと同じようになるわけです。全部棒引きにしてしまうというわけには民主社会ではいきませんので、今、知恵を絞っているんです。新札を発行して変えてみるかとか、いろいろ知恵を絞っているようですが、なかなか名案はありません。なぜないかというと、これは国際化して、グローバル化しておりますから、外国とのレートが安定している中で、くしゃ

くしゃになってしまうんです。これが恐ろしいんです。1ドル106円幾らかでしょう。これが非常に難しい問題なんです。日本国内だけで処理できない問題が外国との絡みである。しかも、自由化というかたちでボーダレスで国境をなくして、自由な貿易をしようではないかということになってきています。

特にソ連がロシアになり、アメリカと同じようなイデオロギーで動き出しましたから、エジプトへ行きましたら、アスワンダムというでかいダムがありまして、そのダムをつくる時はソ連がつくってくださったらしいです。それで、機械の効率が非常に悪いので日本製に変えたと言っておりましたけれども、さらに、イスラエルとがちゃがちゃと戦争をやったときがあるんです。52~53年でしたか。あのころ、三日戦争というのをやった時に、急にアメリカが中に入って、「もうやめろ」と言ってやめさせたんです。それと同時にアメリカがエジプトを支援するようになって、工業化が進んでしまったんです。それで、資本主義社会というのは、目的にしているのは何かというと、これは「Quality of life」といまして、みんなの生活レベルを上げるというところにイデオロギーがあるんです。質をよくするというんです。だから、10年前よりも明らかに今、皆さんの生活程度はよくなっていて、下げろといっても下げられない。私たちは戦争の経験がありますので、いつでも芋の葉っぱで生きろといったら生きられるはずでございます。

ところが、今の若い人たちに言っても恐らく無理です。もう自動車社会になってしまっているんです。この自動車社会というのに日本の意識がうまく合わなかったんです。どんどん、どんどん自動車ができて、スーパーができ初めのうちどうだったですか。すーと出て、ぱーと消えるのがスーパーだったんです。つくっては消え、つくっては消えていたんです。あれは自動車社会の仕組みと合っていなかったんです。今はもうバチッと合っていて、でっかいのをつくりますと、皆さんは3kmでも4kmでも車で走って行って、そこで買い物をして、1週間分を冷蔵庫へ入れておくという仕組みになりました。これはアメリカンスタイルでございます。私が37年前にアメリカへ行ったときもそうだったんです。それで、日本の方と一緒にスーパーへ行ってびっくりしたことがありました。どういうことにびっくりしたかということ、買いただけ買って生活ができるというんです。

それで、その当時の話ばかり多くていけないが、年を取った方もおられますので、昭和20年の8月15日に敗戦になりました。敗戦と言うんだけれど、本当は終戦と言わなければいけない。戦争が終わったと言って、負けたとは言わないんです。日本は終戦という言葉はあるんです。いい言葉なんだけれど、それで、価値観ががらっと変わってしまったわけです。それまでは、僕らはどういう教育を受けていたかということ、神様にお参りすれば戦争に勝てると言っていた。そして、「突け、米兵の心臓を」と竹槍を持ってやあやあとやっていたんです。だけど、負けてみたら急に変わってしまって、男女平等だとかいう話がでてきました。戦後強くなったのは女性の靴下と女性だとかいうような話が出てきたりするぐらい、女性の地位がわーと上がってきたわけです。

それで、教育も平等に男女共学で行い、どうなってくるかということ、女性優位になるんです。もともと女性の方がDNAからいうと優性なんです。男性は一時のろうそくみたいにぱっとするだけです。そんなことで、女性社会をつくり上げると、僕は非常に安定した社会になると日ごろ思っているんです。だから、嫁さんをもらうのではなくて、養子をもらうような社会。そういう社会をつくり上げたらいいのではないかと思いますけれど、これは私の自説でよく「C」に言うと、「先生は女ばかりだからそういうこと言うんでしょ」なんて言われるんですけれど、女性が家で頑張っているからうまくいく部分というのは

すごくあるんです。男性も少し反省して、日曜日は奥様に奉公しないとクビになるというので、サラリーマンも非常に家庭サービスをするようになってきました。そこへ来て自動車でしょう。この威力というのはずごいです。

エジプトがアメリカナイズされてから、自動車が氾濫しまして、お巡りさんの車なんかは、前のライトが一方なくてもぶんぶん走っているんです。それで、おまけに信号がないんです。カイロには1,700万人住んでいるんですが、信号がなくてもみんな、すすす、すすすと動いていられる。中国でも、私が何十年前か前に行ったときに同じような状況だったけれども、「どうして信号をつけないのですか」と聞いたら、「それは金がない」と言われました。だけれど、それでいてあまり事故は起きない。プップ、プップいいながら、車と車の間をすすすと抜けているんです。もう恐ろしいところだなと思いました。けれど、その自動車社会というやつは、ここはトヨタ自動車がいいから、おかげを被っているのは確実な証拠でございますけれども、自動車社会というのを機軸に考えなければいけないんです。ある方に、私が「お嫁さんをもらせ」と言ったら、若い子ですが、「かあちゃんより、まず車」と言ったのがおります。車の方が若い人にとっては魅力的だったかもしれません。そんなかたちで、車が1軒に何台でもあって、家族で走れるような仕組みになって、あのセダンの乗用車に乗っているというのはちょっと格好の悪いような時代になってしまった。

今度、中越地方で地震があって、お気の毒なことだなと思って見ておりますが、話が今日は転々としますが、私もちょっと調べたのでお話してみますと、ここでも大変大きな地震や台風がございました。一番大きかった話だけしましょう。

東南海地震というのが昭和19年、昭和20年に三河地震というのがありました。この三河地震というのがすごかったんです。20年でございますから、私たちが小学校6年生のころで、立っていられませんでした。震度を見ますと、震度が6.8になっているんです。だから、6強の地震があったわけです。それで、幡豆郡の被害が一番大きかったんですが、死者が当時2,300人くらい出ております。田原でも死亡者が出ております。そんなことで、この地方に地震がないということはないので、そういうことは常に意識していなければならないのかなと思っております。三河地震のときに、田原はどんな状況だったのかなと思って調べましたら、全壊が12戸、半壊が132戸、全壊率は0.51%となっております。そして、谷熊で半壊が10戸で比較的多かったようです。それから、福江で全壊が47戸出ております。そんな状況で大変大きな地震がありました。

それから、台風についてみますと、伊勢湾台風というのと13号台風とありました。28年が多分13号台風で、伊勢湾台風が38年です。それから、集中豪雨が一回田原にありまして、これは記憶にある人はありますか、41年ごろだったと思います。私は杉山まで来たんだけど、あとは集中豪雨で来れなかったです。それほど雨がすごかったことがございます。この伊勢湾台風で死んだのが1名、重軽傷が60名出ております。それから、住宅の全壊が240戸、この方が大きいですね。これは田原でもあります。そして、いろいろ入れますと1,900棟くらいあります。それから、田畑の被害はすごかったということです。当時の被害総額で23億円という大惨事だったとしてあります。それが伊勢湾台風です。今年は10ほど台風が来たというけれども、渥美半島でございますから、常に気にしていなければならないことかなと思っているわけです。

そこで、次のお話に入りたいと思いますが、今日は皆さんにレジメが差し上げてありますが、教育についてちょっとお話しします。教育は、これは私の体験からお話を申し上げますので、皆さん、誤解のないようにしてください。

過去は、長男だから教育はしないということだったかもしれませんが、これからは土地田畑を売っても教育はしてあげるといふ時代に頭を切りかえた方がいいかもしれません。と申しますのは、親が子供の面倒を見るのは限界がございます。子供がやる気がある場合は、努めて進めてあげるといふことがいいのではないかと考えております。進みますと、お金のない場合は、適当に出る仕組みが今あるんです。よく勉強する場合はつきます。

私もそういう扱いを受けまして、あまり費用を使わずに大学院まで出ました。それから教員になって、即また大学院の博士課程へ行ったりして、給料をもらいながら行ったりしてありましたけれども、安い給料でございました。それでも勉強の方がおもしろいので、おやじの後を継げば仕事はあったけれども、おやじはたって入れとは言わないものですから、いい気になってやっているうちにそちらの方がおもしろくなってしまって、ご無礼してしまって、おやじに大変ご迷惑をかけたということでございます。

そんなことを考えますと、教育というのは、そこに「人は教育を通して人間となる」と書きました。これは名言でして、デカルト、カント、ショーペンハウエルという哲学者が昔おりまして、ドイツの哲学者が言った言葉なんです。「人間は教育を通して人間となる」。これは、生まれながらにしては、粗雑な人間でございます。ところが、それに教育という注射をしますと、人間の倫理観が非常に強くなったり、社会理念が強くなったりして、立派に社会に貢献できるような人になるという意味かもしれません。そういうことでございますので、どうかたちがいいかわかりませんが、無理強いをしたらいけないと思います。

それで、私がエジプトへお邪魔したとき、向こうで通訳が必ずつかなければいけないんです。日本語のできる通訳がちゃんとしてくれているんだけど、もう1人つけなければいけない。その方がおっしゃっていました。「日本へ来たことがあるの」と聞いたら、「ない。行きたいけど行けない」と言うんです。「どうして?」と言ったら、「お金がきつい」と言うんです。子供の教育にお金をかけていると言うんです。「何をやっているの?」と言ったら、「子供に3カ国語勉強させている」と言うんです。英語、フランス語、ドイツ語です。「それは正規の授業ではないんでしょう」と言ったら、「プライベートスクールです」と。塾です。そして3カ国語のどれかをものにすると生きて行けると言うんです。うわっ、すごいことやっているんだなと思いました。国際的に外人とあいなしに接触するのに、今は英語しかないんです。ほかのはあまり要らないんです。もうフランス語でもドイツ語でも、私たちが大学に入るころは第二外国語、第三外国語までテストされたり、いろいろしてございましたけれども、そのときに勉強しても、後々10年ぐらいしましたら、英語で全部間に合うんです。もうそういう時代になってしまっております。そして、さらにITが普及しまして、これがアメリカの戦争によって得た一つの知恵なんです。戦略的な知恵をIT化してしまったんです。だから、全部英語なんです。日本語でやっているように思うけれど、日本語にアレンジしているだけであって、もともとは全部英語なんです。

そうすると、全地球がアングロサクソン系の発想に変わっていってしまう。それで、エジプトではアラビア語が国語なのに、アラビア語の方が難しいというんです。へびみたいにちょろちょろとなって、棒になったり、ひゅっひゅっとなって、一文字も読めないような文字を書かれる。これを勉強する方が難しく

て、英語の方がやさしいというんです。そうしてみると、どこへ行っても、ホテルでも何でも全部英語です。

ところが、日本人はどうだろうかと考えますと、英語をしゃべるときがないんです。田原にいて英語の先生だったら別ですが、「Hello！」なんてごあいさつしてくれるのは1人もおりません。「Where are you from？」なんて言っただけ、そんなのは、「やあ、やあ」と言って握手すれば通訳がついてくれて、みんな用足してしまっていて、何も困ることはないわけですが、向こうの人たちは、あらゆるところで、英語でやらなければならないところが日常生活にあるんです。英語社会ではなくてもあるんです。そのぐらい、もうアングロサクソンのイデオロギーから、それから、言葉から、共通語になってしまっているわけです。

数日前に、国連の赤石さんとご一緒になったときも、ごあいさつは日本語でばっばとやりました。台風が来たりして大変な状況でございましたけれど、すっかり秋になりましたなんて日本語で言って、今度は、外人の方が多いわけですから、英語でばっばっばとやる。ああいう方たちは一代、アメリカの大学を出てからずっとおられていて、もう日本語よりも英語の方が達人なぐらいで、日本語の方がおかしいかというようなことがあるぐらいの生活になっていると思います。

私の大学にも英語の先生がいて、英語をしゃべると日本語で返事をしてくるんです。向こうは日本語を聞きたいわけですが、英語なんかはどうでもいいんです。一言でも日本語で言うわけですが、「このごろ何を勉強しているの」と言うと、「義経を勉強しています」とか言うわけですが。日本人たちの言葉を一言でも知りたいという考えです。だけど、英語だけは何としても、読み書きはともかく、話すということをやらせなければいけないと思います。それにはネイティブの人にならなければだめです。そんな気がいたします。繰り返し日本人たちにお世話になっても、どうもうまくいかない。日本のアクセントはア、イ、ウ、エ、オしかないけど、向こうはそれでない言葉がいっぱいあってうまくいかないんです。

私が初めてアメリカに行ったときに、ミルクがうまく通じない。それで、ミルクが通じないので、「モー」なんてやってみただけで、コカ・コーラが出てきて、「何だ、これは」と思うと、向こうは面倒だからコカ・コーラを持ってきてしまうんですね。それで、ハワイへ行ったときに、「Can you speak English？」なんてやってみるわけですが、「yes」なんて言って、何が欲しいかというから「コカ・コーラ」と言うと、「コークか」と言うので、「違う。コカ・コーラくれ」と言うと、「コークもコカ・コーラも一緒だよ」なんて今度は日本語で言うから、ああ、そうかと思って、そういう笑い話が出るぐらい日本人というのはまずいんです。それで、向こうで生活した人たちは非常にうまく、スムーズに話しますけれども、だから、国際化といっても、まだこのところが非常におくれておりますので、しゃべる英語というのの一つウエートを置いてやっていくことが大事だと思います。

今度、私がご一緒したアメリカの女性は、インドネシアと日本人とのハーフで、日本語はべらべらでした。何も不自由なくしゃべるんですが、書けないというんです。そのかわり英語はべらべらでございます。

ここで話しているのかわいのか悪いのかわかりませんが、これはPRでございますからいいと思います。エジプトの大使の奥様でダリアさんという方が、エジプトをガイドするから行きませんかと言ってくださったものですから、奥様だから行ったのではなくて、これは身の安全が保てると思って行ったわけです。38歳の、私より背の大きい美女でございます。その方が「やあ」なんてほっぺたにキスを、こっちへ一遍やっ

て、今度は反対側へやってきますから、そんなことはやったことがないから、あとからこっちが火照ってしまって困ったりして、そんな冗談もあるけれども、そういう方のご案内だったら安全だろうと思って行きました。安全でした。空港も日本を出るときは大変だけれど、後は要人パスというのをくださるので、要人パスというものがどういうものか、私はわからなかったですが、飛行機に乗るのでもエジプト航空で行きますから、降りても貴賓席へ入れてくださって、別の入り口からすっと出れるんです。それから、観光するときは、アレクサンドリアからずっと南の方のアスワン、さらにもう少し南まで行きました。そして、必要なところへSPがついてくださるんです。SPというのは常の格好をされていて、ピストルだけ後へ持っているんです。お食事などをしていると、その隣の一つ置いた席ぐらいにお座りくださって、これはなかなか大変なことだなと思っていました。

この間、東京で反省会があるときに、明石さんが来てくださって、お話があったんですけど、そのときには今度はご主人がみえまして、ご主人は日本語ができるんです。若いころ日本におられて、大使になって来たわけです。奥様はイギリスの大学を出て、向こうで新聞記者をやっておられた方でした。非常に大使の方たちというのは親愛の情が強いんです。1回会っているいろいろお話をすると、本当のマイフレンドでおつき合いができるんです。日本人はシャイだからなかなかうまくおつき合いがしにくいので、「やあやあ」なんてうまくいけないけれど、外国の方たちというのはおおらかで、特にアメリカの方というのは非常におおらかでございます。

そんなことで、教育では、英語とパソコンはどうしてもやっておかなければいけない一つの手段だと思えますので、孫あたりでも関心があったら、ぜひ進めて、知能指数の高いかたちをとっていくのがいいことだと思うんです。嫌なものを無理してもいけないと思うんです。水際へ行って牛に水を飲めというのと一緒に、水際までは行くけれども、牛は飲まないです。だから、自分で競争意識を持ったり、関心を持ってやるというときには、全面支援をしてあげてやるような教育の仕組みが非常に大切ではないかなと、このごろ思うんです。

僕らはほっぽらかしですから、勉強しろだの何だの言われたいし、むしろ、勉強すると井戸堀になるということを盛んに言われました。井戸堀というのは家を売ってしまって、後は井戸と堀だけが残るということです。井戸と堀というのは売りようがないから残るんです。政治家になると井戸堀になるぞということで、よくそういう注意を受けましたけれども、子供のころそういうことを聞くと、聞いていないようなふりをしているけれど、ちゃんと聞いているんです。ああ、そういうものかなと思ったりしておりますけれども、私がよそ道へそれなかったのは、これは病気でございまして、いろいろ誘惑もあったりしましたが、絶対動かない。イソギンチャクで動かなかった。これは死ぬか生きるかの死線を越えておりますから。

人間というのは、1回死線を越えるとか、戦争で修羅場を見てくるとか、監獄に入るとか、失礼な言い方だけれど、政治家でも1回入ってくると非常に強くなるそうです。これは人間が心の面で、この世の地獄みたいのところへ放り込まれるわけでしょう。山田春さんが、遺書というか、書かれた文書の中に、この世は極楽だとしてありました。「極楽はこの世にあり」としてあって、なるほどなと思いました。だから、いいことを求めて生きるということだろうと思います。そんなことで、人間というのは、ひどい目にあったり、一度火傷をすると「膾（なます）を吹く」と言います。なますは冷たいものですが、ふっふと

吹いてさまして食べるようになるということで、懲りますと生き方を覚えてしまうんです。

私は、とにかく研究ということに非常な関心があって、自分がもう1回病気をしたら死ぬという仮説を立てているんです。そして、打ち切ったものが一つあります。酒です。若いころはよく酒を飲みました。ここにいる克佳君あたりとはいとこなものだから、よく酒を飲んだりしましたけれど、あるときからぱたっと飲まなくなりました。それは病気をしてからです。神に誓いました。「もう以後、酒は飲みませんので、胃腸を痛めないでください」と。それで酒をやめてしまったんです。だから、学生は烏龍茶を必ず持ってきます。この頃はちょっと飲みますけれど、それは家内を失って、1人になったからちょっとだけと思って、その間にも飲んではいたことは飲みました。これは御神酒といいまして、神様に上げて、下げたものはもう酒ではないんです。もう酒ではないのでちょっとだけいただくということはありませんけれども、そんなことで酒を断酒して、一代きたような面があります。

それから、タバコはおやじがよく吸いまして、おやじは89歳まで生きましたけれど、立て続けに吸っていたんです。それで、ある年、高齢になってから、盲腸で渥美病院に入院しました。そのときに見舞いに来た人が置いていった飲みさしのタバコを拾って吸い出したのを見まして、これは大変なことだと思いました。医者にとめられているのに「ああ、うまいな」なんて吸っているから、それも人の吸ったカスですよ。そんなことを見たり、それから、おやじが「おれがタバコをやまらんで、おまえはやめろ」と言うんです。僕は吸わなかったけれど、吸うようなことがあったにしてもやめろと言うんです。「おれがやめろで、おまえもやめろ」と言うのだったらわかるけれど、「おれがやまらんで、おまえはやめろ」と言うのはおかしいと思いましたけど、それがおやじの遺言です。そんなかたちで、タバコだけはちょっと吸わずにすんでしましまして、おいしそうに吸っているのを見ていると、特に葉巻など吸っていると、ああ、うらやましいなと思って見えています。

そんなことで、自己表現が多いですが、教育というものは、子供たちに先々の職業選択を早くから、おまえは何を希望しているんだというようなことを言うてはいけないと思います。言って挫折するとまた悲劇ですから。子供たち自身が考えるようなオリエンテーションをしてあげるといいと思います。私たちが高校生になっても職業指導なんていうものは全くありませんでした。将来何になっていいのかわけがわからなくて、しかも田原ですと、小野田セメントにお勤めの方が比較的恵まれていたように思います。それで、白谷は割合がわら屋根が多くて、これは白谷に石灰が取れまして、この荷役というのをやっていたので、日銭が入ったんです。それで、鉛筆がないというと、荷役へ行ってきて、買ってきて、子供に与えるというようなことがありました。事実、私も見ております。そんな時代があったわけですから、そこに何か産業が張りつくと、割合恵まれたかたちになって、小野田セメントなんていうのはすばらしい会社でございましたから、ここにお勤めの方たちは白谷でも2人ほどおりました。それから、郵便局あたりが安定していたとか、役場の方たちも安定していた。それで、農協もただみたいなお仕事でございまして、皆さん苦労しておりました。あれはお役のようなかたちではなかったかな。今日は漁業組合長の敏一さんなどもおみえになっているというけれど、ちょっと、中が暗いものだから私からは見にくくて、わかりにくいですが、敏一さんなども村でお役みたいなかたちで、持ち回りでお仕事を交代でやっていたように思います。

そんなことをいろいろ考えまして、さあ、退職になったので私も家へ入れるぞと思って楽しみにしてい

たら家内が亡くなってしまいまして、プライベートな話ばかりが多いけれども、これは一つのモデルでございますから、うろうろ外へ出ていたから罰が当たったというようなことかもしれません。七つも年下の家内に先立たれてまして、大体、女性が先に亡くなるというのは、何か私の日常生活に悪いことがあったかなと反省したわけです。というのは、私のおふくろも54歳で亡くなっているんです。女運がないのかなと思ったりはするけれど、おふくろが早かったために、私は家内に日常生活をものすごくきちっとした生活をしてもらっていました。私ももう1回病気をすると死んでしまうと思うから、私もきちっとしていました。非常にピュアというかきれいな生活をしておりました。

だから、1人になってから不良みたいな生活をしようかということ、これはまた難しいです。不良がまじめになるのは難しいというけれど、まじめなのが不良になるのもなかなか難しいことだというのがよくわかりました。そう思って、まじめのままでもいいかと思ったりしながら、3年ぐらい経ちました。

私の周りでもご主人を亡くした方たちがおられます。私の教え子や知り合いの女性でも多いです。そうすると、割合に主人が亡くなると、大変失礼ですけど、るんるん気分になりまして、初め1年ぐらいはしょげておるけれども、何だか元気になってしまって、お友達と外国へ行ったりゴルフをやったりして、そういうのが「河合先生、ゴルフやろうか」とか、「夕食食べようか」と来るものだから、「そうか」と行って、僕は男芸者だなといつも思っているんです。女の子たち3~4人と一緒に世間話をしたりして、「もうここでやめるぞ」と言うと、「やめんでもいいじゃないの」なんて言うから、またひよろひよろ出て行ったりすると、その方たちの生活体制がわかるわけです。初めのうちはものを言わないけれども、だんだんと人間というのは言うようになるんです。みんな見かけによらず苦労しているんだなと思うんです。

それで、「仏様に何と言ってお参りしているの」と聞くと、ちーんとやって、「あなたのおかげで楽しんでおります」と言う。もう65歳を過ぎている人たちですけど、そんなごあいさつをしていると言うんです。男はどうかというと、男は着るものも食べるものも全くわからないんです。お茶の葉がどこにあるかで大騒ぎになってしまう。私の場合は、たまたま次女がご養子をいただいて、名古屋市大の助教授ですけど、これが名古屋に家があるんだけど、子供の小学校をこちらから上げるといって急遽入ってきまして、家内が病気のうちからずっと一緒におりました。2番目の子供なんですけれど、具合のいいのは、御飯の味が一緒なんです。おふくろと。おかしなものです。あれは食べているだけだと思うけれども、味が一緒なんです。これには本当に、ほんとに驚きました。嫁だったら恐らく辛いとか、ネギの長さが長いとか思いつつ、ご馳走になっておいしい、おいしいと言わなければならないけれど、子供だったらそういうことありませんから、今のところ満足しているのが具合悪いような気に時々なるんです。他の女性にお世話になった方がよさそうな気がするけれど、その方法はなかなか難しい。千に一つぐらいの穴しか見えないので、とか思ったりしているわけです。

だから、私は地元で育って、長男で田原に非常な借金を持っているような気が常にするので、特に白谷の村に借金を持っているような気がします。それで、何か村にしてあげることはないかなと思って、一つ考えたのが、今日、始まる前に白谷の祝詞（いわいうた）というのが音楽でかかっていたでしょう。あれは田原の一つの名物になると思うんです。あれは二十数年前に雪治さんとか、正一さんとか、それから、敏一さん、克佳君などに、「どうかな、ちょっとその祝詞（いわいうた）をひとつ残しておきたいんだけ

ど」と言って、豊川でLPにしたんです。「いや、これで末代残るな」と思って、村の人の戸数分、70軒ぐらい差し上げまして、やれやれと思っていたら、今度は村の人から「あれをもらったけど、もうLPなんていうのは今どきプレーヤーもないし、CDにしてくれ」と言われて、それは大変だということで、また今度はCDにするために、どこに頼んだのか覚えがないものですから、ヤマト楽器というところをお願いしたら、やっぱりプロですね。探してきたんです。この方たちがつくったと。なるほど、会ってみたらあったような気がするなど。それで、そこがCDにしてくださったんです。それで、また村の人たちに差し上げました。

それで、田原の白谷といえば、白い谷というのは石灰が出たから恐らく白谷と名前をつけた。白い谷ですね。石灰が出て、昔は鍾乳洞があったということで、私のうちの前から皆さんがろうそくを持って、鍾乳洞へ入っていたそうです。残っていれば名所になっているけれど、今はもう洞穴になっております。あそこで、じゃんじゃかとやってもよそには影響がないから、音楽堂にするといいとか、いろいろな発想がありますけれど、それは先々の人たちが考えることです。あれはコタマという山で、あそこの山に春一番で桜が咲くときがあります。山桜です。それが咲くときに渥美湾にコチが入ってくるんです。卵を産みに入るんです。それで、三枚網というのがうちにありまして、おじいさんとやりに行くと、こんなやつが5匹も6匹もかかってくるんです。それが桜の花の咲くときと合っているというのが不思議でしょうがない。「おじいさん、ぼちぼち時期だね」と言うと、「よし、行くか」なんて出かけました。

それから、メジロというのがいるでしょう。目のところが白い鳥、あれは益鳥でとってはいけないんです。あれをとるのがまたおもしろくて。先生にしかられ、しかられ、一番よくしかられたのが宮元金英先生という恩師です。まだ野田でご健在でおられるはずでございます。益鳥だからとったらいかんというので、当時、巣箱の中に自分が入れられまして涙をポロポロこぼしておる紙芝居をやったんです。それを見て、自分が入れられたら困るなどと思って、「おまえたち、鳥をとるとはこういうことだぞ」と言って、環境教育、野鳥保護運動かな、そういうようなものを指導してくれて、3日か4日はおとなしくしておるんだけれど、また出かけていく。ねずみ捕りに芋をつるして椿の木へやっておくと、蜜を吸いに来たやつが引っかかるんです。そして、胸に黄色の真っ直ぐの線が入っているのは、「チューン、チュ」と鳴くんです。その鳴き声を競うわけです。それで、子供たちは勉強より何より、そういうことに胸をとどろかせていました。

それから、山の探偵がありまして、小さな川が山間からおりてくる。そういうところへ行きますと粘土があるんです。それを探し当てるのがなかなか大変で、あちらの川、こちらの川へと行くわけです。そうすると蛇がいて、腰を抜かしそうになったりするわけですが、今日も白谷を通っていたらイタチが横切るんです。昔はイタチに横切られると、その日は不運だとか言われておりましたけれども、今日は講演で、あまり不運でもないなどと思っておるわけで、そのイタチは、私の田んぼのところから隣にやぶがあるんですが、そこのところへ走り込みました。まだイタチがいるんだなどと思って、そう心配したことないなど思ったりしております。

それから、最後になりましたけれども、皆さんは産業を大事にする思いを一つ強めてほしいと思います。特に、臨海部に出る皆さんの理解を深めてあげてください。ここの所得が皆さんの生活水準を全般的に上げている材料になっていることは事実でございます。私は三十何年、三河港の計画を、だれが一体、計画

をして進めたかということ、この前、東三河懇話会というものがあって、そこで話せというので話しました。桑原知事の話や杉本企業局長の話や、それから、河合市長とか、神野太郎とか、上村千一郎とか、村田敬次郎とか、そういう人たちのお話です。陳情政治の仕組みがうまくできていたということをお話しました。あれは、左派系の人だと恐らくうまくいっていなかったかもしれません。左派系の方も当時おられました。こういう方もおられることは大変いいことで、一方的に話が進んでいくところに、これはいいかということを書いてくださるので、聞く耳を持たなければいけないと日ごろ思っております。愛知大学はそういう牙城でございますので、私のことを聞いてもらう立場に私は常におったわけでございます。ありましたけれども、それでも、皆さん、鷹揚にお相手して下さって、私は一代おれました。「おまえはやめたらどこへ行くんだ」ということを酒を飲むとよく言われましたけど、「おれはここが生まれ故郷なんで、おまえたちを追い出す」ということが最後の詰めだったんですけど、追い出したり、追い出されずにお互いに仲よく終わったというのが私の実情でございます。

もう時間が数分しかございませんが、もう一、二お話申し上げておきたいと思えます。今度、渥美町と合併というかたちになりますけれども、ここの観光客がちょっと減っていることが心配でございます。渥美火力が体力を失っていたり、それから、花の村を閉めて、また再興しているそうでございますけれども、私は、まだ非公式で、テスト的に泊めてもらう申し込みがしてあります。どういう状況になっているのかなと思っております。幡豆別館が引き受けてやるということで、これは社長さんと支配人の山本さんにお目にかかって、「しっかりやってくださいよ」という話をしたんです。

何しろ寂しいです。ゴルフ場は何か商工会がやるとか言っておりますけれども、これも運用はなかなか大変な中身を持っております。けれど、安いからいいということで、私は日ごろ、ゴルフ場というのは会員制をやめて、つぶれかかったのは市とか県がお買いになって、それで、持っている会員権はただにもらうんです。そして、それを市民に開放するような仕組みにしないと、あの何十億円というかけたものを野原にしてしまうというのもちょっと考えものだと思います。

ゴルフは非常に体力増強にいいし、それから、足の不自由な方でも遊べるスポーツでございます。それから、人の球を打つのだったら気に入らないけれど、自分の球を打つわけですし、それから、相手の嫌なところへ球を打つ競技とは違うんです。僕は卓球の選手で、6年間成章で卓球をやっていたんですけども、いつも相手が嫌なところへ打つというのは、嫌だと思ってやっていたんです。ゴルフを始めたらしいうことはないし、精神的に相手が自滅していくことは、これはやむを得ないかと、こう見ているんだけど、そういうスポーツでございますので、できたらあちこちつぶれかかっているのを市や県で買う運動でも起こしてあげたらよさそうに思うけれども、私は社会運動をするのがあまり好きではないものだからしてありません。

そんなことで、渥美町は今から観光で生きるということになり、農業で生きるということになり、その農業ももっとさらに近代化していかないと跡取りの問題が起きてくるというようなこともありますけど、子や孫については、伸びていくのはどんどん伸ばしてあげていくようになっていくんだらうと思えます。

私はもう40年、50年空白ですからわかりませんが、私たちのように頭を抑えて、おまえはうちを継ぐんだから教育はしないでいいというような方針で動いていかない時代と思っております。「人間到るところ青山あり」、外国へ行こうが、外国の人と結婚しようが、これは大まかに見てあげて、困ってしまっ

たといわなくてもいいと思います。自由自在に生かしてあげるだけの素養を若い人たちが持っておりますから、自分の選択で、自分の責任で生きていくような道を親が切り開いてあげるといいと思います。そして、同居はできるだけしないことが賢い生き方だと思います。「うちをつくったから来いよ」なんてことはしないで、「好きなところで住め」と言うぐらいの方がいいと思います。それで、「おれのうちは、おれが死んだら適当におまえたちで好きに処分しろよ」というぐらいのおおらかさがあるといいと思います。

それから、もう一つお話しておかなければいけないのは、三宅の殿様でございます。これは公にすべきかどうかはちょっとわかりませんが、これはここ田原では少なくとも12代三宅藩だったんです。そして、今、東京にお住まいでございまして、殿様に当たる方が97歳でこの間お亡くなりになりました。学習院を出まして、もともとは佐賀県の佐賀藩のご養子さんでございます。そして、静かににお住まいになっておりますが、先日お亡くなりになったのでお悔やみに出かけました。そして、90歳のおばあちゃんに当たる方とごあいさつをしました。ちょっと足を悪くしてらしたけど、1時間余りお話をすることができました。そして、お亡くなりなってはおりますが、そういうところの末裔の方がおられるということを皆さんもご承知いただきたいと思います。私たちもこういう役柄をもらわないとあまり関心がない領域でございますけれど、今、お孫さんが家を継いで、いろいろなさっておりますが、昔の殿様だからというようなことの関わり合いはどれも薄くなっていて、田原へおみえになっても、行動は皆さんに見えないようなかたちになっておられるようでございますけれども、先祖の皆さんが、渡辺華山をはじめとして大事にした方でございますから、温かい気持ちをお持ちにならなければいけないのかなと、こういうふうに思っております。

渡辺華山というと、これは田原の売り物でございますから、ひとつ皆さん、どんどん勉強してください。今日も別所さんがおりますけれども、別所さんは、渡辺華山を一生懸命研究をしておられますけれど、来年の4月からは愛知大学の教授になります。70歳までおみえになることに決定をしておりますから、もう公表してもいいでしょう。渡辺華山研究で成果を上げて、愛知大学で評価をされたかたちになっております。そんなことでございますので、渡辺華山をひとつ大事にしていきたいと思っております。

それから、赤羽根町ですけれど、赤羽根町の一番大きな課題というのは、やはり農業を大事にしていくということと、地引き網あたりのこともやっておられるようですが、港を活かして何とかうまく生きていく方法と同時に、ウミガメとサーフィンの兼ね合いを田原市としてしっかりしていかなければいけないことだと思います。あれを自然体に流していくと、いろいろと摩擦が起きてくるので、ウミガメを大事にしてあげて、サーフィンというのは夜中走ってきて、ナンバーを見ますと大阪とか東京とか、この辺の人はあまりおられない。それで、車の外で水を浴びておいて、洋服を変えたり、いろいろしてやっておられますけれども、あれも田原市になった以上、何とか行事でウミガメを守る会の人たちやNPOの人たちともよく話をして、取りまとめをしていって、そして、孵化する仕組みをつくるなり、また、サーフィンは世界大会をやったりしているわけでございますから、こういうことを大事にしていかなければならないと思っております。

どちらにして半島でございますので、皆さんは日ごろ非常に不都合が生じているんです。まわりは海ですから。神島へ渡って伊勢と仲よくするかといっても、なかなかうまくいかないし、「鷹一つ 見つけてうれしい 伊良湖岬」というぐらいのかたちになっておりますから、そういうことで、灯台や藤村、それ

から、芭蕉や三島由紀夫や神島など、そういうものを連ねたり、それから、蒲郡プリンスホテルに志賀直哉がよく来ておったようですけれども、そういうものと連なってでもいいので、何とかこれらをシステム化しないとイケないです。1カ所だけ有名だというだけでは、旅行者としてはうまくないので、豊川稲荷へ来たらず渡辺華山とか、渡辺華山を見たら今度は藤村の「椰子の実」だとか、その後お伊勢さんへ行くとかというルートをつくった方がいいと思います。東京で私が会った方は、毎お正月、お伊勢さんへ行っているんだけど、「河合先生、どこの東名を通ったら一番早く渥美半島へ入れるかね」なんていう質問を受けたりします。それから、東京で皆さんが私に「出身地はどこですか」と言うから、「三宅坂の名家」だと言うと、「三宅坂の名家ってどこですか」と聞かれます。「渥美半島の田原」だと応えます。最近では、「トヨタの田原工場があるところですよ」と言う、皆さん、よくわかるんです。すごいものです。市長さんと一緒にアメリカへ行って、ジョージタウンで私は渡辺華山を英語でスピーチしましたが、うまく役立ったかどうかよくわかりませんが、あと、うたいをやったらそれが人気よかったです。

お時間が来ましたので、ちょっと何か質問をしなければいけないというけれど、質問を受けるようなお話ではなくて、大空へ灰をまいたようなお話で、私は確信の持てるお話はしておりません。遠洋漁業に行ったのが帰って来て、言いたいことを言って帰って行ったぞ、こういうことにしていただくということで、記録は残さないということで、ひとつお願いをしたいと思っています。

郷里でお話をさせてもらうというのは一番うれしいことだと思います。もう残り時間は少ないです。鐘が鳴って、あと余韻だけがわんわんと鳴っているような、その余韻がいつ消えるかということです。私と原町長さんとは同級生で、ともに妻を亡くして、どう生きるか、時々2人で相談しているんだけど、いい知恵が出ません。これは渥美半島で婆やでもお願いして、お食事と身の支度でもしてもらいますか。ご無礼いたしました。

【司会】 それでは、せっかくの機会でございますので、ここで質疑の時間を設けたいと思います。河合先生にお聞きしたいことがございましたら、挙手をもってお願いいたします。

よろしいでしょうか。

ありがとうございました。

本日は、大変すばらしいお話をお聞かせいただき、有意義な講演会を開催できましたことを厚くお礼申し上げます。

それでは、河合先生にご退場いただきます。皆様、いま一度盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

【愛知大学名誉教授・経営学博士：河合秀敏氏】 私の田舎で、青年に入るときに、お仲間入りの杯をありがたくちょうだいしますという儀式があるんです。こんな大きな器で、ヒゲを生やした先輩が並んでいて、中学生のころいただいて、入りました。郷里に戻りましたので、お仲間入りの杯をありがたくちょうだいして、メンバーにさせていただきます。どうぞ、よろしく申し上げます。

どうもありがとうございました。

(講師退場)

【司会】 ありがとうございました。

以上をもちまして、講演会を終了させていただきます。

本日は大変ありがとうございました。